

ラテンアメリカ 民主主義の定着に関する諸問題と

90年代以降の新たな取組み・変化

外国語学部イスパニア語学科 4年

A0154047 島田礼奈

ラテンアメリカ諸国は、19世紀初頭に一齐にスペインなどの宗主国からの独立を達成し、それ以後はほとんどの国で限定的な民主化と軍事独裁化が幾度も繰り返されたりと、政治的に不安定な状況が続いていた。その後、1978年のドミニカ共和国の政権交代を皮切りに、あらゆる国で民政移管が行われ、1980年代にほとんどの国で民主化が達成された。激しい内線下に置かれていた中米諸国でも、1990年代末までには全勢力が参加しての選挙が行われた。

このような80年代から90年代の民主化以後は、以前のように軍政への揺り戻しがおこり、独裁体制が一定期間定着するといった現象はほとんど起こらず、軍事クーデターで政権を奪取することは困難になってきている。また、現在キューバを除く全ての国で自由選挙が行われており、限られた勢力しか選挙で勝利出来なかった独裁体制期に比べると、選挙における公正性は明らかに増したといえる。憲法に基づき、定期的に行われ、全ての勢力が勝利し得る選挙システムが以前よりも整いつつあることはラテンアメリカの政治史において特筆すべき重要な点であり、民主主義の最低限の条件は克服しつつあると言ってよい。

しかしながら、制度としての民主主義が定着化する一方、ラテンアメリカの民主主義の「質」の低さは、しばしば問題視されてきた。例えば、「すべて未遂に終わったとはいえ、ベネズエラ（1992、2002年）、パラグアイ（1996、99、2000年）、エクアドル（2000年）と、軍人によるクーデターの試みもけっして潰えていない」¹し、ハイチやペルー、ドミニカ共和国での選挙では不公正な点も見受けられた。² 貧困層や先住民にとっては投票所へのアクセスが容易でなかったり、彼らの中には大物政治家や元軍人の執拗な脅迫や賄賂で誰に投票するかコントロールされてしまうケースも少なくない。また、軍の政治への介入は日常茶飯事で、民主化後も軍や警察による人権侵害が多数報告されている。

そのような状況を踏まえ、本稿では、どのような要因がラテンアメリカの民主主義の質を低下させているのか、どのような要因が民主主義の定着に關与しているのか、というこ

¹ 浦部浩之「軍 - 政治介入の論理と行動」(松下洋、乗浩子編『ラテンアメリカ 政治と社会』、新評論、2004年)130ページ。

² 大串和雄「序論『民主化』以後のラテンアメリカ政治」(日本国際政治学会編『「民主化」以後のラテンアメリカ政治』、国際政治131号、2002年11月)3ページ。

とに問題意識を置き、その阻害要因を特に筆者が注目する 3 つの事柄に絞り事例研究をする。

第一に、大統領制が孕む問題を挙げる。ラテンアメリカ諸国はキューバを除いて全ての国で大統領制を採用している。しかし、この制度自体が国家の政治体制に始めから多くの問題を含ませ得るという主張がしばしばなされる。

第二に、人権侵害未解決問題を取り上げる。ラテンアメリカでは独裁体制期に政府およびその関係組織による共産主義勢力や反政府者たちに対しての人権侵害が行われた。民主化以後も、過去の人権侵害に関する問題が山積しており、各国内に深い亀裂や不安感をもたらしている。このことが民主主義を不安定化させるひとつの要因ではないかということ を述べる。

第三に、米国との関係に注目する。米国は自身の独立半世紀程後から、直接的にも間接的にもラテンアメリカ社会に深く関わってきた。その関わり方の変遷を辿り、米国の執拗な干渉がラテンアメリカの民主主義の質の低下やその定着に大きく関与しているということ を主張する。

このような民主主義定着の阻害要因がいくつか存在する中、特に 90 年代以降、それらを乗り越えようとする取組みが様々なレベルで起こってきたことも事実であり、それらについても若干触れ考察する。

- 主要参考文献 -

歴史的記憶の回復プロジェクト編『グアテマラ 虐殺の記憶 - 真実と和解を求めて - 』（飯島みどり、狐崎知己、新川志保子共訳、岩波書店、2000 年）。

日本国際政治学会編『「民主化」以後のラテンアメリカ政治』（『国際政治』、131 号、2002 年 11 月）。

S.P.ハンティントン『第三の波 - 20 世紀後半の民主化 - 』（坪郷實、中道寿一、藪野雄三共訳、三嶺書房、1995 年）。

J.リンス他編『大統領制民主主義の失敗 - その比較研究 - 』（中道寿一訳、南窓社、2003 年）

丸山真男『日本の思想』（岩波書店、1961 年）。

大串和雄「罰するべきか許すべきか - 過去の人権侵害に向き合うラテンアメリカ諸国のジレンマ」（『社会科学ジャーナル』、国際基督教大学、40 号、1999 年 2 月）。

J.リンス『民主体制の崩壊』（内山秀夫訳、岩波現代選書、1982 年）。

ステパン『ポスト権威主義』（堀坂浩太郎訳、同文館、1995 年）。